要　旨

1937 年 7 月 7 日、盧溝橋事件が起きて、日中の間に戦争が勃発した。日本では、その戦争を「華北事変」、あるいは「日中戦争」と呼ぶが、中国側では「抗日戦争」と呼ぶ。1945 年８月 15 日日本は降伏するまで、この戦争は八年間も続いて、中国に多大な被害をもたらした。中国の領土が占領されるにつれて、中国の金融、軍事、教育、工業、人口などに激しい変化があった。特にこの戦争によって 2200 万人の犠牲者が出たことは、すべての中国人に、決して忘れることのできない記憶として残っている。

この長い戦争の中に有名な戦役がいくつかある。とりわけ、時間が一番長く、規模が一番大きい、最も有名な戦役は「武漢会戦」（日本では「漢口攻略」あるいは「武漢作戦」と呼ぶ）であった。

1937 年末南京陥落後、中国国民政府が撤退し、武漢を第二の首都にした。1938 年 6 月、日本軍は蔣介石を投降させるため、武漢を攻めていった。その時は国共提携のハネムーンの時期で、国民政府が中国共産党と全国人民から支援を得て、安徽省、江西省、河南省、浙江省及び湖北省にまたがる大規模な「武漢会戦」を始めた。中国軍隊は 1938 年 6 月上旬から 10 月 25 日まで、4 か月も抵抗できたが、結局 10 月 26 日に武漢が陥落され、その時から 6 年 9 か月間占領されていた。

武漢陥落期間において、日本軍は武漢を湖北乃至華中地域を支配する重鎮とみなし、市内も周辺も兵隊が駐在していた。そして、日本軍は 1939 年 4 月武漢で仮武漢特別市政府を設置し、直接軍部に管理され、張之洞の十三人目の息子張仁蠡が第一回目の市長を務めることになった。現在でも武漢にはその時の痕跡が残っており、相当な面積を占める租界区内には、中国とは全く異なる様式の建物が並び、この歴史を無言の裡に語っている。

これは忘れられない歴史であるが、しかし数十年前のこととはいえ、過去のことであり、完全に正確にすべてのことをはっきりさせようと思っても、それはほとんど不可能なこと

だ。とはいえ、本当の歴史を記録し、そこから教訓を得ることが大事なことであり、そのためには、私たちはできる限りたくさん資料を集めて、これらを分析して、歴史の真相を解明しなければならない。ただし、どのような資料でもいいわけではなくて、資料の真偽は見極めなければならない。いい資料とはまずはば広く全般的に記されたものでなければならない。中国で残った資料だけではなく、ほかの国にある資料もチェック必要がある。次に信憑性が高くなければならない。たとえば文書と日記である。文書なら各勢力の立場と毎回の指示をはっきり反映できる。しかも簡単に書き換えられない。日記のほうは作者の本当の気持ちと事件の記録は残されるだろう。

そこで、本論文は主に『日本外交文書』に対する研究である。『日本外交文書』は日本外務省が編纂した文書集で、日本が外交の経緯を明らかにし、あわせて外交交渉上の先例ともなりうる基本的史料を提供することを目的に編纂された。その中、『日本外交文書・日中戦争』は日中戦争の発生から太平洋戦争開戦に至るまでの時期における日中戦争関係外務省記録を特集方式により編纂し、四冊に分けて刊行するものである。『日本外交文書· 日中戦争』の一冊目のタイトルは『日本の対処方針』で、1937 年 7 月から 1941 年 12 月までの日本政府のいわゆる日中戦争の対処方針と平和工作の動向に関する記録が収録されている。この本の中の文書を時間順で整理し、また当時日本外務省東亜局長であった石射猪太郎氏の『石射猪太郎日記』に出てきた事件などで補充すると、武漢会戦まで日本の対中外交方針は大部理解できると考えられる。この史料と合わせて、武漢会戦前の引上居留民、外交平和工作などの重大な事件を改めてみると、新しい手かがりを見つけて、違う考え方で分析できる。あるいは、既存の観点に有力な証拠を提供できる。

本論文の主な内容は以下のとおりである。

『序論』では、研究対象、研究意義と目的、研究方法を述べ、参考した先行研究と資料を紹介した。

『第一章、武漢会戦の歴史背景』では、漢口の歴史的地位、日本との繋がり、武漢会戦

の概要及び意義を紹介した。

『第二章、「日本外交文書・日中戦争」の内容』では、主な研究の資料『日本外交文書』を紹介し、『日本外交文書・日中戦争』第一冊の前四章、つまり 1937 年 7 月から 1938 年 11 月までの文書資料の内容をまとめた。

『第三章、武漢攻略前の外交研究―船津工作とトラウトマン工作を中心として』では、主に船津工作とトラウトマン工作の背景と過程を紹介し、そして、この二つの工作が失敗した原因への分析を通じ、武漢会戦前の外交闘争を示した。

『第四章、揚子江上流日本居留民早期引き揚げ研究』では、揚子江上流にある日本居留民がなぜ早期に引き揚げたかについて、引き揚げの経過を述べ、早期引き上げの原因を分析した。引上居留民の特徴と面する難題もまとめた。

第五章では、『日本外交文書』と『石射猪太郎日記』をベースに、1937 年 7 月から 1938 年 11 月までの日本対中外交大事件を時間順にまとめ、『年表』を作成した。

第六章では、『日本外交文書· 日中戦争』第一冊の第三章の部分、つまり 1937 年 9 月から 1938 年 5 月の間の文書を中国語に訳してみた。

本研究を通じて、1937 年 9 月から 1938 年 11 月の間の日本対中外交政策を明らかにし、武漢会戦までの歴史を新たな考え方から改めて分析できた。作成した年表もこれからの研究に役に立てる。しかし、本研究もしょせん主に『日本外交文書』に基づき、日本政府対中国の外交態度の分析なので、それほど客観的とは言えない。中国、ドイツなどほかの国の資料も集め、第三国の日中戦争に対しての態度及びその比較の研究を通じ、より真実に近い歴史を追求することを今後の研究課題にしていきたいと思う。

キーワード：武漢会戦　『日本外交文書』　船津工作　トラウトマン工作　引上居留民